アイパッチ 願い込め手作り

弱視治療を続ける京都市山科区の小学1年女児の家族が、視力改善用の眼帯「アイパッチ」の手作りを続けている。同じ症状の子どもたちに「目がよくなってほしい」との願いを込め一つずつ縫製する。デザインや肌触りにもこだわった製品として商品化され、人気を集めている。

弱視治療続ける山科の小1女児家族

毎日1～3時間装着 視力発達促す

開発したのは、縫製会社「la・ampleur（ら・あんぷるーる）」（同区）で働く松村朱さん（40）と母の岸田淑子さん（65）。松村さんの長女いとさん（6）は左右に視力差があり、右目がほとんど見えていない弱視と3歳で診断された。医師の指導でメガネを装着するとともに、毎日1～3時間ほどは左目をアイパッチで覆い、右目の視力発達を促してきた。

治療の負担は大きく、アイパッチ装着時は、床が浮き上がって見えることもある。左右でレンズの厚みが違うメガネを見た友人に怖がられたり、通りすがりの人に「小さいのにメガネなんてかわいそう」と言われたりしたこともあるという。岸田さんは「（いとさんが）いつになったらメガネを外せるの、と大泣きした日もあった」と振り返る。

松村さんはいとさんの治療や訓練を見守る中、市販のアイパッチは目を覆うように貼りつけるシール式が多く不快感があることや、かわいい製品がほとんどないことに気づいた。そこで付け心地やデザインに工夫を重ね、メガネに取り付ける布製品を商品化。インターネットで販売し、約2年で300個以上を届けてきた。

いとさんは訓練で右目の視力が改善してきており、今では笑顔で商品モデルを務めている。購入者からは「6歳で診断されて改善は難しいと言われたが、訓練で視力が上がった」「プリキュアみたいでかわいいと喜んでつけてくれる」といった手紙やコメントも寄せられた。

「同じ症状の子にも」商品化

弱視は子どもの50人に1人とされ、発見が遅れると十分な治療効果が得られない可能性がある。このため京都市では7月から、3歳児健診に専用の検査機器を導入する予定。松村さんは「今後弱視と診断される子が増えるかもしれない。困りごとを広くサポートできる製品を届けていきたい」と力を込める。アイパッチは1個1100円から。（森静香）

▲ アイパッチのモデルを務めるいとさん。訓練で弱視は改善してきている（写真は提供）

▶ メガネに装着するアイパッチ。デザインや肌触りの良い素材にこだわっている